

文種別の、扱いやすい単元構成です。

◆

言の葉の森に分け入る

日本語の響き……………水村美苗 10
日本語の表記法……………17

◆

古文編
古文入門

古文の世界へ……………24
児のそら寝 (宇治拾遺物語)……………26
絵仏師良秀 (宇治拾遺物語)……………32

◆

随筆

枕草子……………清少納言 42
春はあけぼの……………44
徒然草……………兼好法師 46
つれづれなるままに……………46
ある人、弓射ることを習ふに……………46
奥山に、猫またといふものありて……………50
雪のおもしろう降りたりし朝……………53
神無月のころ……………54

◆

物語

竹取物語……………62
伊勢物語……………66
芥川……………68

◆

和歌

万葉集……………72
古今和歌集……………78
新古今和歌集……………82
和歌の修辭……………86
和歌の世界へ……………90
和歌……………94
つながろうとする言葉……………96

◆

軍記

平家物語……………98
木曾の最期……………98
装束描写が生み出す効果……………107

◆

日記・紀行

土佐日記……………112
門出……………116
奥の細道……………122
旅立ち……………126
立石寺……………128
松尾芭蕉……………130
忘れ貝……………118
月と暦……………121
大垣……………128
紀貫之……………118

目次 2

冒頭単元では名作の一部を取り上げ、日本の言語文化の世界へ入っていきます。QRコードから音声も提供しています。

- 1 古語辞典……………28
- 2 用言……………34
- 3 助動詞……………57
- 4 接続助詞「ば」……………67
- 5 助詞……………76
- 6 敬語……………108
- 1 歴史的名名遣い……………30
- 2 品詞分類/用言と活用形/動詞/形容詞/形容動詞……………30
- 3 形容詞・形容動詞の語幹用法/省略……………35
- 4 係り結びの法則/音便……………45
- 5 助動詞……………58
- 6 助詞……………71
- 敬語……………109

目次 3

一 漢文編
漢文入門

漢文の世界へ……………132

漢文の基本構造と訓読
成句・格言を読む……………136

置き字／再読文字……………138

身近にある漢文……………140

144

二 故事成語

漁父之利(戦国策)……………146

借虎威(戦国策)……………148

朝三暮四(列子)……………150

推敲(唐詩紀事)……………152

学びを広げる(現代に生きる故事成語)
漢和辞典の活用……………156

三 史話

先從隗始(十八史略)……………158

鷄鳴狗盜(史記)……………160

参考「夜をこめて……」(小倉百人一首・清少納言)
臥薪嘗胆(十八史略)……………163

学びを広げる(史話の登場人物)
歴史を記録する……………170

四 漢詩

四季 春暁……………172

孟浩然……………172

五 文章

春望……………173 杜甫

聞蟬感懷……………174 賈島

八月十五日夜、禁中獨直、對月憶元九……………174 白居易

江雪……………176 柳宗元

冬夜讀書……………177 岑參

靜夜思……………180 李白

望鄉 聞雁……………181 韋應物

『厄除け詩集』より 井伏鱒二……………182

友情 送元二使安西……………182 王維

桂林莊雜詠示諸生……………183 広瀬淡窓

漢詩の世界へ……………184

題自画《孤客入石門図》／草枕……………188 夏目漱石

雑説……………190 韓愈

六 思想

論語……………194

学問 子曰吾十有五而志于学……………194 ほか

人間 子曰巧言令色鮮矣仁……………196 ほか

政治 子曰其身正不令而行……………198 ほか

学びを広げる(現代に生きる『論語』)
孔子と門人……………202

古文・漢文では、それぞれ丁寧な**入門単元**を設け、古典を学ぶ意義を踏まえて学習に入れるようになっています。

漢文を読むために
①漢字の成り立ち／音と訓
②春秋・戦国時代
③漢詩の表現
④古文復興
192 178168154

近代以降の文章編

小説一

羅生門

学びを広げる 古典作品の典拠利用『今昔物語集』

レッスン

学びを広げる 小説の書き換え 

芥川龍之介 204
角田光代 220

詩

小諸なる古城のほとり

時計

文学の扉 近代詩と翻訳詩

サーカス

シジミ

I was born

学びを広げる 詩の朗読会

島崎藤村 226
萩原朔太郎 228
中原中也 230
石垣りん 234
吉野弘 235

小説二

青が消える

夢十夜

文学の扉 夢の中で出かけて行く

村上春樹 242
夏目漱石 251

短歌と俳句

その子二十——短歌十六首

いくたびも——俳句十六句

文学の扉 短歌の近代
文学の扉 季語と歳時記

与謝野晶子ほか 264
正岡子規ほか 272
277

小説三

空缶

待ち伏せ

学びを広げる 小説の読み比べ

林京子 282
ティム・オプライエン／村上春樹訳 302

日本語の内と外

月の誤訳

日本語の部屋 バイリンガル・エキサイトメント

文学の扉 英語で味わう万葉集

多和田葉子 312
リービ英雄 316
ビーター・J・マクミラン 324

資料編

- 文学史年表……………328
- 古典文法要覧……………336
- 古文重要語句……………344
- 漢文の基本形式……………350
- 訓読で注意する語……………348
- 漢文参考略年表……………350
- 巻末古典参考資料……………
- 旧国名・都道府県名対照図……………(1)
- 平安条坊図／内裏／大内裏……………(2)
- 京都付近地図／奈良付近地図……………(3)

- 住居・調度……………(4)
- 装束(文官束帯／武官束帯／直衣／狩衣／唐衣と裳／単の袷と袴)……………(5)
- 陰暦(月の異名と二十四節気／陰暦月齢表)……………(6)
- 古時刻／古方位／十干と十二支……………(7)
- 中国参考地図……………(8)
- 常用漢字表……………



定番から新しい作品まで、文学の学びをしっかりと行える小説・詩歌を採録しています。

読書の扉……………310・326

教科書の凡例を提示しています。

この教科書を使うために

- 全体の構成……古文、漢文、近代以降の文章を、それぞれ精選し、文種によって単元を構成した。
- 単元扉……単元のねらいと学習目標とを示した。
- 各教材の下端には、次の項目を設けた。
 - 脚注 番号をつけ、固有名詞や難解な語句、理解の必要な言葉などを解説した。
 - 脚間 内容理解の手がかりになる箇所に○番号をつけて、問①のように掲げた。
 - 語句 意味や用法に注意し、身につけておきたい語句に*をつけて示した。また、漢文編では、訓詁する上で注意が必要な語を示した。
 - 句法 漢文編では、漢文理解の基礎となる基本的な句法に❖をつけて示した。
- 各教材の末には、次の項目を設けた。
 - 課題 文章の内容を理解するための手がかりとなる項目と、理解した文章の内容をふまえ、主体的、協働的にその理解をより深めるための活動とを、問いや作業の示唆の形で盛り込んだ。
 - 語句と表現 教材中の語句や句法に着目し、語彙力を高めるための問いを設定した。

漢字

近代以降の文章編では、常用漢字習得のために、教材文中の注意すべき漢字を選び、掲載した。

学びを広げる

単元の目標に対応し、言葉の学びを主体的且つ協働的に深め、広げられるような課題を適宜設けた。

古典の扉

言語文化に対する興味や関心を喚起するための発展的内容や解説を示した。

● 文法から解釈へ……古典文法を学ぶことが、正確な理解や深い解釈につながる例を示し、解説した。

● 古文を読むために・漢文を読むために……古典を学ぶ上での基本的な事項について要点をまとめた。

● 単元の振り返り……各単元末には、単元での学習を振り返って確認し、次の学習に生かしていくための振り返りの観点を示した。

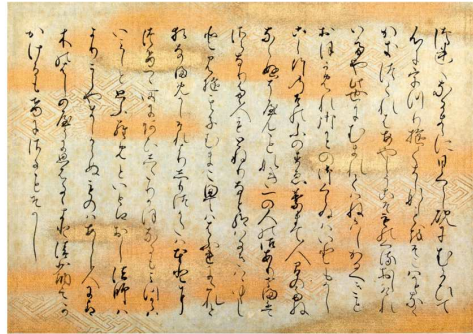
● 読書の扉……読書に親しみ、読書活動を広げる手がかりとして、教材と関連のある書籍を選び、紹介した。

● 参照ページ・行……「課題」などで教材本文を引用する場合、引用箇所の下に(・)をつけて示した。上の数字がページ、下の数字が行を示す。

● 二次元コード……適宜、二次元コードを付し、リンク先に学習の参考となる情報を掲載した。



単元扉では教材一覧のほか、単元および各教材のテーマ・学習のねらいを明示しています。



枕草子

清少納言

春はあけぼの／ありがたきもの

古典の扉 古典の四季・美意識

古文を読むために 係り結びの法則／音便

徒然草

兼好法師

参考 つれづれなるままに

ある人、弓射ることを習ふに／丹波に出雲といふ所あり／
奥山に、猫またといふものありて／ある者、小野道風の書ける／
雪のおもしろう降りたりし朝／神無月のころ

学びを広げる 章段の読み比べ「家居のつきづかしく」

文法から解釈へ 助動詞

古文を読むために 助動詞

随筆

- 「随筆」に描かれた筆者の心情を読み取る
- 「枕草子」「徒然草」に描かれた季節感や人生観について考える

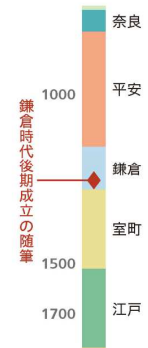


各教材後の「課題」では、内容理解の問いと、言語活動を行う課題とが設定されています。

徒然草

兼好法師

随筆 46



参考 つれづれなるままに

* つれづれなるままに、日暮らし硯に向かひて、心にうつりゆくよしなしごとを、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。
(序段)

* 語句
つれづれなり 日暮らし あやし

ある人、弓射ることを習ふに

ある人、弓射ることを習ふに、諸矢をたばさみて的に向かふ。師のいはく、「初心の人、二つの矢を持つことなかれ。のちの矢を頼みて、初めの矢になほざりの心あり。毎度ただ得失なく、この一矢に定むべしと思へ。」と言ふ。

1 諸矢 的に向かう時に作法として持つ、二本一組の矢。
2 得失 成功と失敗。ここでは当たるか当たらないかという迷いの心。

作品の成立時代が一目瞭然の「成立年代バー」で、時代背景を踏まえた読解を行います。

わづかに二つの矢、師の前にて一つをおろかにせんと思はんや。懈怠の心、自ら知らずといへども、師これを知る。この戒め、万事にわたるべし。
道を学する人、夕べには朝あらんことを思ひ、朝には夕べあらんことを思ひて、重ねてねんごろに修せんことを期す。いはんや一刹那のうちにおいて、懈怠の心あることを知らんや。なんぞ、ただ今の一念において、ただちにすることのはなはだ難き。
(第九二段)

問① 「定む」とはどういうことか。
3 懈怠の心 怠け心。
問② 「これ」は何を指すか。
4 道を学する人 仏道を修行する人。
5 一刹那 ほんの一瞬という意味の仏教語。後出の「一念」も同じ。
* 語句
おろかなり ねんごろなり

課題

- 一 次のそれぞれの場合、「懈怠の心」(47・1) はどのような形で表れているか。本文に即して具体的に説明してみよう。
 - ① 「弓射ることを習ふ」(46・1) 人の場合。
 - ② 「道を学する人」(47・3) の場合。
- 二 筆者のいう「懈怠の心」(47・1) についてどのように考えるか。自分の体験をもとに、話し合ってみよう。

語句と表現

- 一 次の傍線部の助動詞の意味の違いを調べてみよう。
 - ① ア おろかにせんと(47・1)
イ 思はんや。(47・1)
ウ 朝あらんことを思ひ、(47・3)
 - ② ア 一矢に定むべしと思へ。(46・3)
イ 万事にわたるべし。(47・2)

徒然草 47

神無月のころ

神無月のころ、栗栖野といふ所を過ぎて、ある山里に尋ね入ること侍りしに、遙かなる苔の細道を踏み分けて、心細く住みなしたる庵あり。木の葉に埋もる懸樋の雫ならでは、つゆおとなふものなし。閑伽棚に菊・紅葉など折り散らしたる、さすがに住む人のあればなるべし。かくてもあられけるよと、あはれに見るほどに、かなたの庭に、大きな柑子の木の、枝もたわわになりたるが周りをきびしく囲ひたりしこそ、少しことさめて、この木なからましかばと覚えしか。

(第二段)

- 1 栗栖野 現在の京都市山科区栗栖野。(↓巻末③)
 2 懸樋 地上にかけ渡して水を引く樋。
 問①「雫」と縁の深い語(縁語)を抜き出せ。
 3 閑伽棚 仏に供えるための水や花を置く棚。
 4 柑子 蜜柑の一種。

* 語句
 つゆ おとなふ さすがに
 あはれなり ことさむ 覚え

課題

- 「おとなふものなし。」(54・3)とは、どのような様子を表したのか、説明してみよう。
- 筆者が「柑子の木」(54・5)を見て「少しことさめ」(54・6)たのはなぜか、話し合ってみよう。

語句と表現

- 本文には助動詞「き」が多用されている。そこからどのようなことがわかるか、説明してみよう。

「学びを広げる」では、同作品の他章段や同時代の別作品、異なる時代の同テーマ作品などを取り上げ、**比べ読み・合わせ読み**を行えます。

学びを広げる

『徒然草』第一〇段「家居のつきづきしく」には、次のような記述がある。

後徳大寺大臣の、寢殿に鶯みさせじとて、繩を張られたりけるを、西行が見て、「鶯のゐたらんは、何かは苦しかるべき。この殿の御心さばかりにこそ。」とて、そののちは参らざりけると聞き侍るに、綾小路宮のおはします小坂殿の棟に、いづぞや繩を引かれたりしかば、かの例思ひ出でられ侍りしに、まことや、「鳥の群れみて、池の蛙を取りければ、御覧じ悲しませ給ひてなん。」と人の語りしこそ、さてはいみじくこそと覚えしか。徳大寺にも、いかなるゆゑか侍りけん。

この話と「神無月のころ」とを読み比べ、「囲ひたりし」(54・6)ことと「繩を引かれたりし」(55・6)ことと対する筆者の受けとめ方にどのような違いがあるか話し合ってみよう。

後徳大寺大臣が、邸の正殿に鶯をとまらせまいとして、繩を張りになつていたので、西行が見て、「鶯がとまっていたからといって、何の不都合があるだろうか。この大臣殿の御心はこの程度でいらしたのだ。」と言って、その後は参上しなかったと聞いておりますが、綾小路宮がいらつしやる小坂殿の棟に、いづだつたか繩をお引きになつていたので、その先例が思い出されたので、ところ、そういえば、「鳥が群れていて、池の蛙を捕つたので、それをご覧になり、かわいそうにお思いになつたからのことなのです。」と人が語つたのは、なるほどそれならば結構なことであつたと思われたのであつた。後徳大寺大臣の場合にも、何か理由があつたのでございませうか。

◆徒然草

随筆。筆者は兼好法師。鎌倉時代後期の成立。二百四十余段からなる。内容は、さまざまな逸話や、人生論、自然論、文芸論など多方面にわたっている。題名は序段に由来する。本文は『新編日本古典文学全集』によった。

◆兼好法師

一二八三（弘安六）年？～一三五二（正平七）年以降。三十歳頃に出家して、京都郊外に住んだ。和漢の学や有職故実に通じ、和歌にも優れていた。自撰家集として『兼好法師集』がある。

国語総合教科書でも好評だったコラム「文法から解釈へ」は、直近の教材に出てくる具体的な表現を取り上げ、実践的な古文読解を行えます。

文法から解釈へ ③

……助動詞

『徒然草』「丹波に出雲といふ所あり」（48ページ）で、ほかでは見たことのない獅子の珍しい立ち姿に感涙を流した聖海上人は、そのいわれを神官に問うている。

A 「ちと承らばや。」と言はれければ、

B 「ちと承らばや。」と言ひければ、

さて、AとBにはどのような違いがあるだろうか。

AもBも、聖海上人がとつた言動に違いはない。しかし、この話を読み味わっていく上では、AとBの差は大きい。

AとBの違いは地の文にある。動詞「言ふ」と過去の助動詞「けり」の間に、「れ」があるかないかの差である。この「れ」は、助動詞「る」の連用形で、受身・尊敬・自発・可能の意味を持つ。文脈に当てはめていくと、ここでは「なざる」という尊敬の意味で使われていることがわかるだろう。地の文は、筆者である兼好法師の言葉であるから、兼好法師が聖海上人に対して敬語を使っているのである。

改めて「丹波に出雲といふ所あり」を読み直してみよう。筆者が聖海上人に敬意を表しているところは、Aの記述以外にはない。この話全体の筆者の語り口から考えると、むしろBの表現のほうが自然に思える。それにもかかわらず、兼好法師はここだけAのように敬語を使い、聖海上人を敬っている。なぜなのだろうか。

獅子の向きが違っていたのは、子どもたちのいたずらであつた。そこには聖海上人が期待していた「深きゆゑ」「習ひ」など、何一つなかった。結果的に子どもものいたずらに対して流された「上人の感涙」は「いたづらに」なり、上人は読者の笑いの対象となつている。このような話の展開を考えたとき、そこにだけ不自然に使われた尊敬語は、聖海上人を持ち上げておいて最後に落とすための伏線であり、どうやら話の展開により大きな落差を作るための兼好法師の工夫であつたのではないか、という可能性に気づくであろう。BよりもAでは、聖海上人の早とちりぶりが、思い込みの強さが、さらに強く印象づけられるのである。

たつた一語の助動詞であるが、それと向き合うことで兼好法師の息づかいが伝わってくる。言葉を大切にして作品を読み解いていきたい。



兼好法師像（狩野探幽筆 江戸時代前期）

「古文を読むために」は全6回で、**古典文法の基礎基本**を丁寧かつ簡潔に解説しています。

古文を読むために④
助動詞

助動詞とは、**活用がある付属語**で、主に用言や他の助動詞、体言に付いてその語の意味を助け補うはたらきをする。助動詞を学ぶ上で大切なことは次の三つである。

- 1 **意味**……その助動詞が付くことで、なんらかの意味が添えられる。複数の意味をもつ助動詞もあり、見きわめが必要となる。
 - 2 **活用**……用言と同様に、未然形・連用形・終止形・連体形・已然形・命令形に活用する。その活用パターンを覚えておかなければならない。
 - 3 **接続**……どのような品詞、どのような活用形に接続するのかわかる。違いがある。
- ここでは1を軸として、主な助動詞について確認しておく。
2・3については**文語助動詞活用表**(338ページ)参照。

過去 き・けり

き……自分が直接体験した過去の事柄を示す。
けり……伝聞した過去の事柄を示す。物語や説話で多用される。詠嘆の意味もある。

- 1 ある山里に尋ね入ること待りしに、(54・1)
 - 2 はふはふ家に入りけり。(51・5)
- 1は、書き手の実体験であることを表しており、2は、書き手が伝聞した過去の話を語っている。

完了 つ・ぬ・たり・り

つ……意志的に行われる動作の完了を表す。
ぬ……自然に進行する動きの完了を表す。

*「つ・ぬ」には、強意・並列の意味もある。
たり・り……動作や状態が完了し、結果が継続していることを表す。

- 1 かうこそ燃えけれど、心得つるなり。(33・1)
 - 2 懐に持ちたりけるも、水に入りぬ。(51・4)
 - 3 大社を移して、めでたく造れり。(48・1)
- 1は、火炎を見て良秀が「納得した」と言っているので、意志的な動作の完了。2は、懐に持つという状態が続いていた

ことを示している。「たり」は**存续**。また、法師が川に飛び込んだために持ち物が必然的に水に入ってしまったので「ぬ」は**自然な動きの完了**である。3の「り」は、社殿が立派に造られ、**継続**していることを表している。

打消 ず

ず……打消を表す。
猫また、あやまたず尾もとへふと寄り来て、(50・12)

推量 む・むず・らむ・けむ・べし・らし・めり・まし
む「ん」・むず「んず」……**推量・意志・婉曲**などの意味を表す。

- らむ……現在の推量・現在の原因推量などを表す。
 - けむ……過去の推量・過去の原因推量などを表す。
 - べし……**推量・意志・当然**など。むよりも確信の度合いが高い。
 - らし……客観的事実を根拠に**推定**する。
 - めり……目で見ただけから**推定**する。婉曲の意味もある。
 - まし……**反実仮想**を表す。
- 1 頸のほどを食はんとす。(50・13)
- 2 もの知りぬべき顔したる神官(49・2)
- 3 ひとり歩かん身は心すべきことにこそと(50・8)
- 4 この木なからましかばと覚えしか。(54・6)

打消推量 じ・まじ

じ……むの打消で、**打消推量・打消意志**を表す。
まじ……べしの打消で、**打消推量・打消意志**を表す。

- 1 浮けることには待らじなれども、(52・2)……**打消推量**
 - 2 京にはあらじ、(72・2)……**打消意志**
- 1は、「いい加減なことではないだろうが」という意味で、**打消推量**。2は、「京にはいるまい」と言って東国に旅立つので、**打消意志**を表す。

断定 なり・たり

なり・たり……**断定・存在**の意味を表す。
このわたりに見知れる僧なり。(51・2)

伝聞・推定 なり

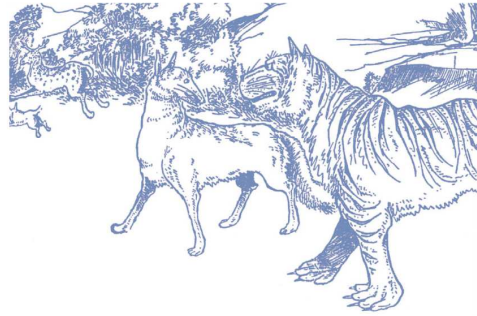
なり……人から聞いたことを表す**伝聞**や、**聴覚に基づく推定**を表す。
男もすなる日記といふものを、(112・1)……**伝聞**

現代の言語文化にもつながる、**読んでおきたい漢文作品**を採録しています。

二

故事成語

- 「故事成語」に表れた教訓や風刺などを読み取る
- 「故事成語」を理解し、現代における意義を考える



漁父之利
借虎威
朝三暮四
推敲

(戦国策)
(戦国策)
(列子)
(唐詩紀事)

学びを広げる 現代に生きる故事成語
漢文を読むために ① 漢字の成り立ち／音と訓
古典の扉 漢和辞典の活用



使役・尊敬 す・さす・しむ

す・さす・しむ…他者にある行為をさせることを表す使役や、動作主に敬意を表す尊敬の意味を表す。

・かおもちひ召させん。(48・3)……使役

受身・自発・可能・尊敬 る・らる

る・らる…他から動作を受ける受身や、自然にそうなる自発、ある動作ができる可能、動作主に対する尊敬を表す。

1 かくてもあられけるよと、(54・4)

2 「ちと承らばや。」と言はれければ、(49・3)

1の訳は「このようにしても暮らしていられるのだなあ」となるので、可能の意、2は、筆者が「言ふ」という動作の主体である上人に対する尊敬の意を表している。

願望 まほし・たし

まほし・たし…あることが実現することを願望望む意。

自分についての願望や他に対する願望を表す。

・紫のゆかりを見て、つづきの見まほしく覚ゆれど、

〔更級日記〕

・家にありたき木は、松・桜。〔徒然草〕

比況 ごとし

ごとし…「のようだ」と、何かに類似していることを表す。同等や例示の意味を表す場合もある。

・ただ春の夜の夢のごとし。(98・3)

単元の振り返り

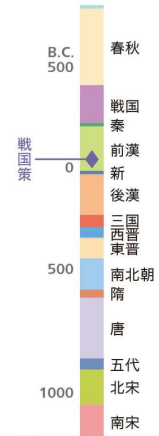
- 「随筆」を読み、筆者の思いを理解できたか
- 「随筆」に描かれた季節感や人生観について、自分の意見をもつことができたか
- さらなる学びへの意欲をもてたか

単元ごとに**振り返り項目を明示**。観点別評価にもつながります。

借虎威

故事成語

148



虎求百獸而食之。得狐。狐曰、
 子無敢食我也。天帝使我長百獸。今、
 子食我、是逆天帝命也。子以我为不信、
 吾为子先行。子随我、後觀百獸之见我、
 而敢不走乎？」
 虎以爲然。故遂与之行。獸見之皆走。
 虎不知獸畏己而走也。以爲畏狐也。

5

- 1 子 あなた。
- 2 天帝 万物をつかさどる天の神。
- 3 走 逃げる。

問① 「之」は何を指すか。

各教材後の「課題」では、内容理解の問いと、言語活動を行う課題とが設定されています。



『成語故事』より

(戦国策)

課題

- 一 「然」(148)の内容を具体的に説明してみよう。
- 二 「虎の威を借る」は、現在どのような意味で使われているか、調べてみよう。

語句と表現

- 一 「観」(148)と「見」(148)の意味の違いを調べ、その違いがわかりやすい熟語をそれぞれあげてみよう。

◆句法

- 無_レ敢_ス 決してするな。「禁止」
- 使_ム [A] [B] [A]に[B]させる。「使役」
- 今_レもしく_レならば「仮定」
- 敢_テ不_レ乎_ニ どうして(し)ないで
 だろうか、いや、きつと(する)。「反語」

*訓読で注意する語
 之 以為 与

借虎威

149

漢文の「成立年代バー」は、中国における時代区分で表示しています。

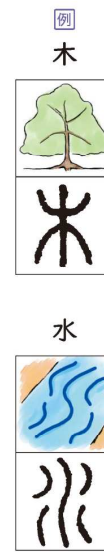
「漢文を読むために」は全4回で、漢字や音訓、訓読の基本などを丁寧かつ簡潔に解説しています。

漢文を読むために①
漢字の成り立ち／音と訓

漢字の成り立ち

漢字は、古代中国で作られた文字である。三千年以上前から使われていて、現在使用されている文字の中では、最も歴史が長い。漢字はその成り立ちにより次の四種に分けられる。

1 象形文字……絵が簡略化されて文字になった漢字。



2 指事文字……抽象的なものを、線や点で表したり、象形文字に線や点を加えて作った漢字。



漢字の音 漢字の発音は、もともと中国の発音しかなかった。それが日本に伝わり、日本風の発音が定着した。これを音という。伝わった時代によって、音は次のように分けられる。例にあげた字以外にも、複数の音をもつ字がないか、調べてみよう。

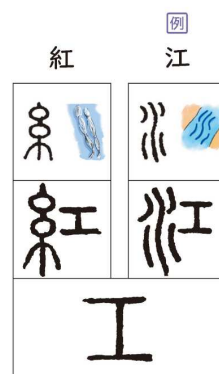
- ◆ 異音……中国の呉地方の発音に基づくとき、奈良時代以前に日本に伝えられた。仏教語に多く残る。
例 修行(シュギョウ) 頭脳(ズノウ)
 - ◆ 漢音……隋・唐代、都であった長安の音。遣隋使・遣唐使・留学僧などによって伝えられた。
例 行動(コウドウ) 頭角(トウカク)
 - ◆ 唐宋音……宋・元・明・清時代に日本に伝わった音。
例 行脚(アンギヤ) 饅頭(マンジュウ)
- このほかに本来の音と異なるが、慣用的に使われている音(慣用音という)がある。
例 消耗(ショウモウ) 輸入(ユニユウ)

故事成語 154

3 会意文字……複数の文字の意味を組み合わせた漢字。



4 形声文字……発音を表す部分と意味を表す部分を組み合わせた漢字。



象形・指事・会意・形声のほかに、転注と仮借という漢字の運用法を合わせて、「六書」という。

漢字の訓

漢字の持つ意味に対して、日本語をあてはめたものを訓という。訓には次の三種類がある。

- ◎ 正訓……漢字の意味に対応した日本語をあてはめたもの。
例 山(やま) 川(かわ)
 - ◎ 義訓……漢字に固定した一般的な訓ではなく、その漢字の文脈上の意味を訓としてあてはめたもの。
例 百合(ゆり) 田舎(いなか)
 - ◎ 国訓……漢字のものと意味とは関係のない日本語をあてはめたもの。
例 鮭(さけ) 鮎(あゆ)
- なお、漢文の訓読においては、一字の漢字は訓で読み、二字以上の熟語は漢音で読むのが原則である。
- 漢字と日本語 固有の文字がなかった日本では、漢字の音や訓を利用して、「阿米(あめ)」、「也麻(やま)」、「夏橙(なつかし)」などと表していた。この用法は『万葉集』に多く見られるため、「万葉仮名」という。漢字から平仮名と片仮名が作り出されると、漢字と仮名を併用して表すようになる。これを「漢字仮名交じり文」といい、現在の文章の表記の原型となっている。

「古典の扉」は古文編6か所、漢文編5か所に配置されており、古典作品を読む際の入口になるような情報を紹介しています。

古典の扉

漢和辞典の活用

漢字は、一字一字全てが、その要素として、字形(文字の形)・字音(発音)・字義(意味)の三つを備えている。中国の長い歴史の中で、漢字の字形には変化があったが、字音・字義にも変化が生じた。

木9 楽

(13) 1958 697D 教2 たのしい・たのしむ ⑩ 神楽

韻脚

白 白 泊 泊 泊 準 楽

木11 楽

(15) 6059 6A02 疑覚入 yue ギョウ(ゲウ) 疑効去

【語義】A(名) 五声(宮・商・角・徵・羽)と八音(金・石・糸・竹・匏・土・革・木)の総称。B(動) 演奏する。かなでる。カナツ。C(形) たのしい・タノシ。D(動) 愉快である。喜ぶさま。例 不亦楽一乎。E(動) やすらかである。心が満たされたさま。安楽「和楽」。F(動) たのしむ。G(動) 愉快に思う。喜ぶ。例 我自楽。H(動) たのしむ。I(動) 愉快に思う。喜ぶ。例 我自楽。

●A/Bで示された音と語義の対応に注目してみよう。

故事成語 156

一つの文字に一つの字音、一つの字義という漢字もあるが、一つの文字が一つの固定した意味だけを表すのではなく、複数の意味を有している場合が少なくない。新しい意味が加わったり、他の意味に転用されたりしてきたのである。また、なかには、一つの漢字に複数の字音があつて、それぞれの字音で意味が異なる漢字もある。

一例として、漢和辞典で「楽」という漢字を引いてみよう。「楽」は、「音楽」の意味の場合は「ガク」、「快樂」「娯楽」など「楽しい、楽しむ」意味の場合は「ラク」という音を用いるということがわかる。実際に漢和辞典を引いて、他の漢字の意味も確認してみよう。

単元の振り返り

- 今も生きる人生の教訓や風刺などを読み取ることができたか
●「故事成語」との対話をとおして、自分の意見をもつことができたか
●さらなる学びへの意欲をもてたか



羅生門

芥川龍之介

レッスン

学びを広げる 小説の書き換え 書くこと

古典作品の典拠利用『今昔物語集』

角田光代

小説

- 作品の構成、場面や状況における登場人物の心情を理解する
●小説とその典拠になった説話を読み比べ、小説の読みを深める
●語りの仕組みを理解し、語り手を換えて物語を書き換える

近代以降の文章編では、心情・情景の読み取りを主なねらいとする文学作品を採録しています。



教材本文のページはシンプルなレイアウトで、文章の読みに集中しやすくなっています。

羅生門

芥川龍之介

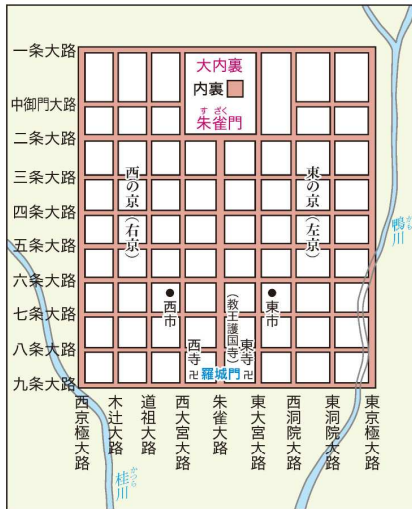
小説(二) 204

ある日の暮れ方のことである。一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待っていた。広い門の下には、この男の外に誰もいない。ただ、ところどころ丹塗りの剝けた、大きな円柱に、きりぎりすが一匹止まっている。羅生門が、朱雀大路にある以上は、この男の外にも、雨やみをする市女笠や揉鳥帽子が、もう二、三人はありそうなものである。それが、この男の外には誰もいない。

なぜかという、この二、三年、京都には、地震とか辻風とか火事とか飢饉とかいう災いが続いて起こった。そこで洛中のさびれ方はひととおりではない。旧記によると、仏像や仏具を打ち砕いて、その丹がいたり、金銀の箔がついたりした木を、道端に積み重ねて、薪の料に売っていたということである。洛中がその始末であるから、羅生門の修理などは、もとより誰も捨てて顧みる者がなかった。するとその荒れ果てたのをよ

いことにして、狐狸が棲む。盗人が棲む。とうとうしまいは、引き取り手のない死人を、この門へ持ってきて、捨てていくという習慣さえできた。そこで、日の目が見えなくなると、誰でも気味を悪がって、この門の近所へは足踏みをしないことになってしまったのである。

そのかわりまたからすがどこからか、たくさん集まってきた。昼間見ると、そのからすが、何羽となく輪を描いて、高い鴟尾の周りを鳴きながら、飛び回っている。ことに門の上の空が、夕焼けで赤くなる時には、それがごまをまいたように、はつきり見えた。



平安京略図

からすは、もちろん、門の上にある死人の肉を、ついにみに来るのである。——もつとも今日は、刻限が遅いせいか、一羽も見えない。ただ、ところどころ、崩れかかった、そうしてその崩れ目に長い草の生えた石段の上に、からすのくそが、点々と白くこびりついているのが見える。下人は七段ある石

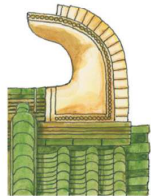
15

10

5 揉鳥帽子 男性が平常服の際に用いたかぶり物。



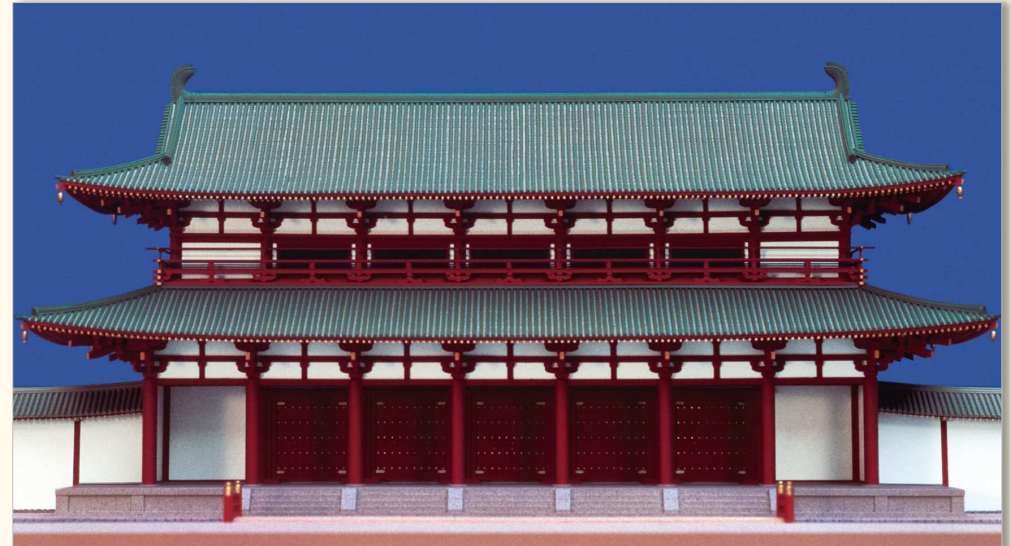
6 辻風 つむじ風。旋風。
7 旧記 古い記録。
8 鴟尾 宮殿・仏殿などの棟の両端に取り付けた飾り。



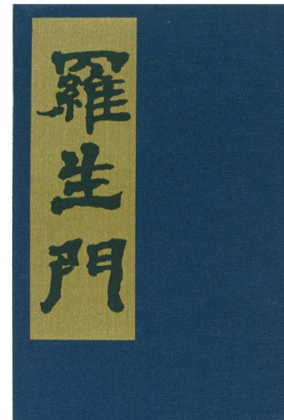
1 羅生門 平安京の正門。朱雀大路の南端にあつた二階造りの大きな門。本来は「羅城門」と表記。
2 丹塗り 赤色の顔料である丹または朱で塗つてあること。
3 朱雀大路 平安京の中央を南北に走る大通り。
4 市女笠 菅や竹で編んだ笠。もとは市女(市場で物を売る女性)が用い、のちに、女性の外出の際に多く着用された。

10

5



羅城門復元模型



『羅生門』初版本表紙(1917[大正6]年)

羅生門
207

写真・図版を効果的に配置し、**時代背景や情景のイメージ**を豊かにします。

課題

- 一 この作品の背景となっている京都の町や羅生門の描写に注目し、そこに描かれている当時の社会状況についてまとめてみよう。
- 二 下人が羅生門の下に至るまでの経緯をふまえ、門の下での下人の心情についてまとめてみよう。
- 三 楼に上って以降の下人の心理の推移を、箇条書きにして整理してみよう。
- 四 老婆は自分の行いについてどのように語っているか、また、下人はそれをどのように受け止めているか、整理してみよう。
- 五 「下人と老婆」のその後の物語は、どのようなものになると思うか。話し合ってみよう。

課題では内容・心情理解の問いのほか、話し合いの課題も設定しています。

語句と表現

- 一 本文中から動物を使った比喩を抜き出し、どのような効果があるか、考えてみよう。
- 二 次の語を使って短文を作ってみよう。
 - ・ 途方に暮れる
 - ・ たかをくぐる

漢字

- | | | | | | | | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 剥げる | 204 | 誰 | 204 | 顧みる | 204 | 崩れる | 205 | 尻 | 206 | 据える | 206 |
| 頬 | 206 | 眺める | 204 | 衰微 | 206 | 余波 | 206 | 大儀 | 208 | 憂え | 208 |
| 楼 | 209 | 無造作 | 209 | 腐乱 | 210 | 嗅覚 | 210 | 痩せる | 210 | 暫時 | 210 |
| 挿す | 211 | 憎悪 | 211 | 語弊 | 211 | 大股 | 212 | 塞ぐ | 212 | 罵る | 212 |
| 成就 | 213 | 唇 | 213 | 喉 | 213 | 侮蔑 | 213 | 嘲る | 215 | 蹴る | 215 |
| | | | | | | | | | | | |

羅生門
217

学びを広げる

「羅生門」という作品は、次の『今昔物語集』の「羅城門登り層見死人盗人語第十八」という説話を主な素材としている。

今は昔、摂津の国のほとりより盗みせむがために京に上りける男の、日の未だ明かりければ、羅城門の下に立ち隠れて立てりけるに、朱雀の方に人しげく歩きければ、人の静まるまでと思ひて、門の下に待ち立てりけるに、山城の方より人どものあまた来たる音のしければ、それに見えじと思ひて、門の上層にやはらかつり登りたりけるに、見れば、火ほのかにともしたり。

盗人、「怪し。」と思ひて、連子よりのぞきければ、若き女の死にて伏したるあり。その枕上に火をともして、年いみじく老いたる姫の白髪白きが、その死人の枕上に居て、死人の髪をかなぐり抜き取るなりけり。盗人これを見るに、心も得ねば、「これはもし鬼にやあらむ。」と思ひて恐ろしけれども、「もし死人にてもぞある。脅して試みむ。」と思ひて、やはら戸を開けて、刀を抜き、己は、己は。」と言ひて走り寄り

今は昔、摂津の国のあたりから、盗みを働こうと京に上つてきた男が、まだ日が暮れないので、羅城門の下に立ち隠れていたが、朱雀大路の方はまだ人の行き来が激しい。そこで、人通りが静まるまでと思ひ、門の下に立つて時のたつのを待っていると、山城の方から大勢の人がやってくる声だったので、それに見られまいと門の二階にそつとよじ登った。見れば、ぼんやりと火がともっている。

盗人は、おかしなことだと思ひ、連子窓からのぞいてみると、若い女が死んで横たわっている。その枕元に火をともし、ひどく年老いた白髪の老婆がそこにすわつて、死人の髪を手荒く抜き取っているのだつた。

盗人はこの様子を見て、どうにも合点がいかず、もしやこれは鬼ではなからうかと思ひ、ぞつとしたが、あるいはすでに死んだ者の霊かもしれぬ。ひとつ脅して試してみようと思ひ、そつと戸を開け刀を抜いて、「こいつめ、こいつめ。」と叫んで走りかかると、老婆はあわてふ

「学びを広げる」では、教材に関連する別作品を取り上げるなど、探究的な学びにつながる材料を用意します。

ければ、姫手まどひをして、手を摺りてまどへば、盗人、「こは何ぞの姫のかくはし居たるぞ。」と問ひければ、姫、「己が主にておはしましつる人の失せ給へるを、あつかふ人の無ければ、かくて置き奉りたるなり。その御髪の丈に余りて長ければ、それを抜き取りて鬘にせむとて抜くなり。助け給へ。」と言ひければ、盗人、死人の着たる衣と姫の着たる衣と抜き取りてある髪とを奪ひ取りて、下り走りて逃げて去りにけり。

さて、その上の層には死人の骸骨ぞ多かりける。死にたる人の葬りなどえせぬをば、この門の上にぞ置きける。

このことはその盗人の人に語りけるを聞き継ぎてかく語り伝へたるとや。

ためき、手をすり合せて狼狽する。そこで、盗人が、「おまへはいったい何者だ。何をしているのだ。」ときくと、老婆は、「じつはこの方は私の主人でいらつしやいますが、お亡くなりになって、弔いをしてくれる人もおりませんが、こうしてここにお置きしているのです。そのおぐしが背丈に余るほど長いので、それを抜き取り鬘にしようと思つて抜いているのです。どうぞ、お助けください。」と言う。それを聞いて、盗人は死人の着ていた着物と老婆の着衣、それに抜き取つてあつた髪の毛まで奪い取つて、二階から駆け降り、どこも知れず逃げ去つた。

ところで、この二階には死人の骸骨がたくさん転がっていた。葬式などできない死人をこの門の上に置いたのである。

このことはその盗人が人に語つたのを聞き継いで、こう語り伝えているということだ。

「羅生門」と説話とを読み比べ、書きぶりや展開などについて、共通点や相違点を発表し、話し合つてみよう。

付録には、古典読解の際にポイントとなる事項や文学史など、**参照資料**を掲載しています。

古文重要語句

● 古文の各教材の本文中で*を付した語句を、五十音順に掲げた。
● 数字は教科書の本文ページを示す(太字は*を付したページ)。
● 品詞名及び活用の種類は略記した。
● 動(動詞)、補助(補助動詞)、形(形容詞)、形動(形容動詞)、副(副詞)、名(名詞)

資料編 342

あ	明 ^め かし「形ク」	112	飽 ^み く「動カ四」	74	あさまし「形シク」	32	悪 ^{あく} し「形ク」	63	遊 ^{あそ} ぶ「動バ四」	64	貴 ^{たか} なり「形動ナリ」	64	あはれなり「形動ナリ」	33	あやしがる「動マ四」	46	あやしむ「動マ四」	48	ありがたし「形ク」	42	歩 ^あ く「動カ四」	50	いかで「副」	73	いかに「副」	42	いささかなり「形動ナリ」	48	いたし「形ク」	51	いたづらなり「形動ナリ」	64	言 ^{こと} ふかひなし「連語」	102				
い	いやし「形シク」	64	いらふ「動ハ下二」	26	浮 ^う く「動カ四」	52	憂 ^{うれ} し「形ク」	27	失 ^う す「動サ下二」	85	内 ^{うち} 裏 ^{うら} 「名」	104	うつくし「形シク」	62	うつつ「名」	69	うるはし「形シク」	73	え：(打遣)「副」	116	おとなし「形シク」	49	おとなふ「動ハ四」	54	音 ^ね に聞 ^き く「連語」	64	おどろく「動カ四」	26	おどろく「動カ四」	83	おはす「動サ変	62	おはす「補助サ変	70	おぼつかなし「形ク」	102	覚 ^さ ゆ「動ヤ下二」	126
お	おもしろし「形ク」	53	おろかなり「形動ナリ」	47	か	かしこし「形ク」	63	かたち「名」	42	かたみに「副」	69	語 ^{こと} らふ「動ハ四」	42	かなし「形シク」	42	聞 ^き こゆ「動ヤ下二」	100	くさぐさ「名」	101	具 ^ぐ す「動サ変	102	口 ^{くち} 惜 ^し し「形シク」	53	けうらなり「形動ナリ」	101	心得 ^{こころえ} 「動ア下二」	102	ことさむ「動マ下二」	48	こぼる「動ラ下二」	118	候 ^{さむ} ふ「動ハ四」	116					

訓読で注意する語

● 漢文の各教材の本文中で*を付した訓読で注意する語を、五十音順に掲げた。
● 数字は教科書の本文ページを示す(太字は*を付したページ)。

資料編 348

あ	【もつて】 ～で～をもって「手段・材料」	161	【ひきケル】 率いる	165	【みぎケル】 率いる	191	【なす】 行 ^な う・なす・する・～とする	148	【つくル】 作る	159	【ためニ】 ～のために	161	【やム】 とまる・やむ	166	【すでニ】 既に・もう	197				
い	【すグ・すゴス】 通る・通り過ぎる・度	146	【あやまつ・あやまち】 誤る・過ら・過	195	【そなフ・そなハル】 そろえる・準備する	199	【つぶさニ】 すべて・詳しく	152	【見 ^{けん} 】 見る・会う・見える	148	【まみユ】 お目にかかる	160	【くる・らル】 「受身」↓345ページ	175	【あらはル・あらはス】 現れる・表す	190	【がヘンズ】 承知する・許可する	147		
か	【置き字】 ↓140ページ	146	【しかレドモ・しかルニ・しかモ】 し	146	【すなはチ】 ～ならば	164	【ゆク】 行く	164	【これ・この・こニ】 これ・この・こニ	152	【コレ】 これこそ「強調」	158	【の】 ～の・～のような・～が	161	【みづから】 自分・自分で	165	【おのづから】 自然に	162	【より】 ～より・～から	183